

令和5年 3月27日	病虫害発生予報 4月号	茨城県病虫害防除所
---------------	----------------	-----------

機械での転落・転倒・はさまれなど農作業事故が増加する季節です。
危険箇所を確認し、余裕を持った作業を行いましょう。

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
イチゴ：うどんこ病、アザミウマ類・・・・・・・・・・・・・・・・	1
イチゴ：アブラムシ類、コナジラミ類・・・・・・・・・・・・・・・・	2
促成・半促成ピーマン：アザミウマ類・・・・・・・・・・・・・・・・	3
○麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！・・・・・・・・	3
【その他の病虫害】	
イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、春ハクサイ、春レタス・・・・・・・・	4
○サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）・・・・・・・・	5
○イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について・・・・・・・・	6
【防除所レポート】	
県央地域におけるヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率について・・・・・・・・	6
チャバネアオカメムシの越冬状況（令和5年2月調査）・・・・・・・・	7
II. 今月の気象予報	8
最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの 「農薬登録情報提供システム」（https://pesticide.maff.go.jp/）で確認することができます。	
詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病虫害防除所 Tel：0299-45-8200 ホームページでは病虫害・農薬関連情報をご覧いただけます。 https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosiadou/ フェロモントラップデータ随時更新予定	



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病葉率（本年値 0.2%、平年値 0.05%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 20%、平年値 3%）は平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 予防には、硫黄くん煙剤によるくん煙処理が省力的で有効である。
- ⑤ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。
- ⑥ 薬剤によっては、果実に汚れが付くものもあるので、十分注意する。

2. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生花率（本年値 6.0%、過去 6 年平均値 1.8%）、発生地点率（本年値 90%、過去 6 年平均値 23%）ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生の少ないうちに防除を徹底する。気温の上昇に伴い、密度が急激に増加するため注意する。
- ② 薬剤散布は、十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(イチゴ 続き)

3. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生葉率（本年値 6.2%、平年値 1.0%）、発生地点率（本年値 70%、平年値 20%）ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アブラムシ類は増殖が速く、多発すると葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

4. コナジラミ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生葉率（本年値 2.5%、平年値 0.3%）、発生地点率（本年値 60%、平年値 5%）ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると、防除が困難となるほか、葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成・半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、促成ピーマンにおける寄生花率（本年値 86.5%、平年値 50.2%）は平年より高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 6.3 頭、平年値 4.1 頭）は平年並～やや多い。
- ② 3月中旬現在、半促成ピーマンにおける寄生花率（本年値 44.5%、平年値 32.3%）は平年並、一花あたりの寄生虫数（本年値 6.3 頭、平年値 2.4 頭）は平年よりやや多い。
- ③ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルスを媒介するので発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！

麦類赤かび病の防除適期は、六条大麦では出穂～穂揃期に開花を確認した時（出穂期の 3 日後頃）、二条大麦では穂から蒴殻が出ていること確認した時（出穂期の 12～14 日後頃）、小麦では開花始期～開花期（出穂期の 7～10 日後頃）です。

予測される出穂期および防除適期は麦種や播種期によって異なるため、圃場ごとに出穂状況を確認して適期に防除しましょう。

なお、麦類の予測出穂期および赤かび病防除適期は病虫害速報でお知らせします。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	ハダニ類	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
促成ピーマン	斑点病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや少ない	3月中旬現在、平年並～やや少ない発生である。
	黄化えそ病	発生量：－	3月中旬現在、一部圃場で発生を認めている。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるアザミウマ類の防除を徹底する。
促成トマト	黄化葉巻病	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
	うどんこ病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	べと病		
	アブラムシ類	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
	タバココナジラミ		
	ハダニ類		
春ハクサイ	べと病	発生量：平年並 ～やや多い	3月中旬現在、平年並～やや多い発生である。
春レタス	菌核病	発生量：やや多い ～多い	3月中旬現在、平年よりやや多い～多い発生である。
	すそ枯病	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。

サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中に地上部の茎葉が枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。

育苗期から生育期、収穫期から貯蔵期まで、年間を通して発生するおそれがあるので、本病の侵入防止と早期発見に努めましょう。

〔病気の特徴〕

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（畑に残った葉や茎、イモ）等が伝染源となる。苗床では葉巻や株の萎縮、葉の変色、苗基部の黒変等の症状が発生する。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、注意が必要である。

〔防除対策〕

＜育苗にあたっての注意＞

- ・ 苗の増殖は、ウイルスフリー苗を用いる。
- ・ 来歴が不明な種イモや切苗は絶対に使用しない。
- ・ 多発地域からは、種イモや切苗を持ち込まない。
- ・ 生産者間で種イモや切苗の譲渡等を行わない。

＜作業にあたっての注意＞

- ・ 発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
- ・ 作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水で良く洗浄する。

＜健全苗を確保するために＞

〔苗床・育苗準備時の対応〕

- ・ 種イモから苗を増殖する場合は、病害等が発生していない圃場で生産されたイモを選別して用いる。伏せ込む前の種イモは消毒を行う。
- ・ 育苗終了後は、苗床の残さを育苗ハウスから持ち出して適切に処分する。苗床は、耕うんして残さの分解を促したのち、梅雨明け後の高温期に太陽熱土壌消毒を行う。

〔採苗時の対応〕

- ・ 採苗時のハサミはこまめに消毒を行う。苗は地際から5 cm以上の位置で切る。
- ・ 採苗した苗は、採苗後速やかに苗消毒を行う。
- ・ 苗消毒用の薬液は、使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。

〔購入苗への対応〕

- ・ 切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

＜侵入に備えた対策＞

- ・ 排水の悪い圃場は、本病が侵入した際に発病しやすい傾向があるため、明きょ設置や耕盤破砕、枕畝の途中に排水溝を設置するなど、排水対策を徹底する。
- ・ 圃場ごとに植え付けた苗の苗床の場所や採苗日、ウイルスフリー苗などの購入先を記録する。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、抜き取り等を行わず、速やかに各地域の農業改良普及センターまでご連絡ください。

イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、多発すると減収する病気です。発病してからの治療はできないため、ヒメトビウンカの防除が重要です。

本病は、平成 26 年頃以降、県西地域を中心に発生が多くみられています。

近年、県西地域、県南の一部地域において保毒虫率が高い状態が続いており、本年の調査結果でも、保毒虫率が高い地点が認められています。対策の手を緩めず、引き続き、ヒメトビウンカの防除を徹底すると良い状況です。

引き続き、ヒメトビウンカを対象とした薬剤の育苗箱施用による防除対策を行いましょう。なお、第 1 世代成虫は 6 月頃に本田に侵入するので、育苗箱施用剤は効果の長い薬剤を選択しましょう。

※ヒメトビウンカのイミダクロプリド（IRAC コード：4A、主な商品名：アドマイヤーCR 箱粒剤）に対する薬剤感受性が低下傾向にある地点が認められていますので、前作等で同コードの薬剤の効果の低下が疑われた場合は、別コードの薬剤の使用を検討してください。

また、育苗箱施用を行わなかった場合や、施用しても本病の発生が多い地域では、6 月中下旬頃のヒメトビウンカ幼虫を対象とした本田防除が有効です。

なお、5 月下旬発表予定の病害虫発生予報 6 月号で本田での防除適期等の情報を提供する予定です。

（令和 2 年 12 月 24 日 病害虫発生予報 1 月号 p3-4 防除所レポート参照）

（令和 5 年 3 月 22 日発表 令和 4 年度病害虫発生予察注意報第 3 号参照）

防除所レポート

【県央地域におけるヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率について】

県央地域における令和 4 年のイネ縞葉枯病の発生状況は、8 月上旬調査において発生地点率および発病株率が平年より高く、ひこばえ（再生イネ）での発病も県西地域に次いで多く認められた。

（令和 4 年度病害虫発生予報 10 月号および 11 月号 防除所レポート参照）

そこで、例年、県西・県南地域で調査しているヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率（以下、保毒虫率）を、県央地域 2 地点においても調査した。

その結果、2 地点とも、育苗箱施用等による薬剤防除を推奨する保毒虫率 5%※に近い値であった（表）。 ※農業研究所作成のマニュアルにおいて、育苗箱施用等による薬剤防除を推奨する値

（県西・県南地域の調査地点の保毒虫率の値は、令和 5 年 3 月 22 日発表病害虫発生注意報第 3 号参照）

表 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率

地域	調査地点	保毒虫率（％） ¹⁾
県央	水戸市 杉崎町	4.3
	那珂市 鹿島	4.8

1) 水田畦畔等より採集、簡易ELISA法により検定

採集日：令和5年2月20日 検定日：令和5年3月6、7日

サンプル数：各地点188頭

今後、保毒虫率を高めないためにも、イネ縞葉枯病の発生に注意し、次作において、早めの秋季耕起や冬季の畦畔除草等の耕種的防除を徹底する。また、以前から本病の発生の多い圃場では、ヒメトビウンカを対象として育苗箱施用剤等での防除を検討する。

チャバネアオカメムシの越冬状況（令和5年2月調査）

ナシ、カキ、リンゴなどの重要害虫であるチャバネアオカメムシの越冬数の調査結果をお知らせします。

本年2月上旬に山林の表層土を含んだ落葉を1地点当たり30リットル採取し、チャバネアオカメムシ成虫の越冬数を調査しました。落葉の採取は水戸市、石岡市、常陸太田市、笠間市、つくば市、桜川市、行方市、鉾田市、小美玉市、茨城町の合計42地点で行いました。

その結果、越冬成虫数（本年値0.4頭、平年値1.9頭）は平年並、越冬地点率（本年値21%、平年値39%）は平年並からやや低くなりました（表）。

なお、本年を含む過去11年間の越冬状況の推移をみると、越冬成虫数・越冬地点率ともに多い年と少ない年を交互に繰り返しており、本年は少ない年にあたります（図）。そのため、越冬世代成虫の果樹園への飛来数（4～7月）は、平年よりやや少ないと予想されますが、注意が必要です。

また、病害虫防除所では果樹カメムシ類について、予察灯調査（4～10月）や、サクラにおける発生量調査（4～5月）を行うので、今後発表する情報を参考にしてください。

表 チャバネアオカメムシの越冬状況

調査項目	令和5年2月		平年
	調査値	順位 ²⁾	調査値
越冬成虫数(頭) ¹⁾	0.4	7位	1.9
越冬地点率(%)	21	8位	39

1) 成虫数/落葉30リットル当たり

2) 本年を含む過去11年中の順位



写真 チャバネアオカメムシ(成虫)

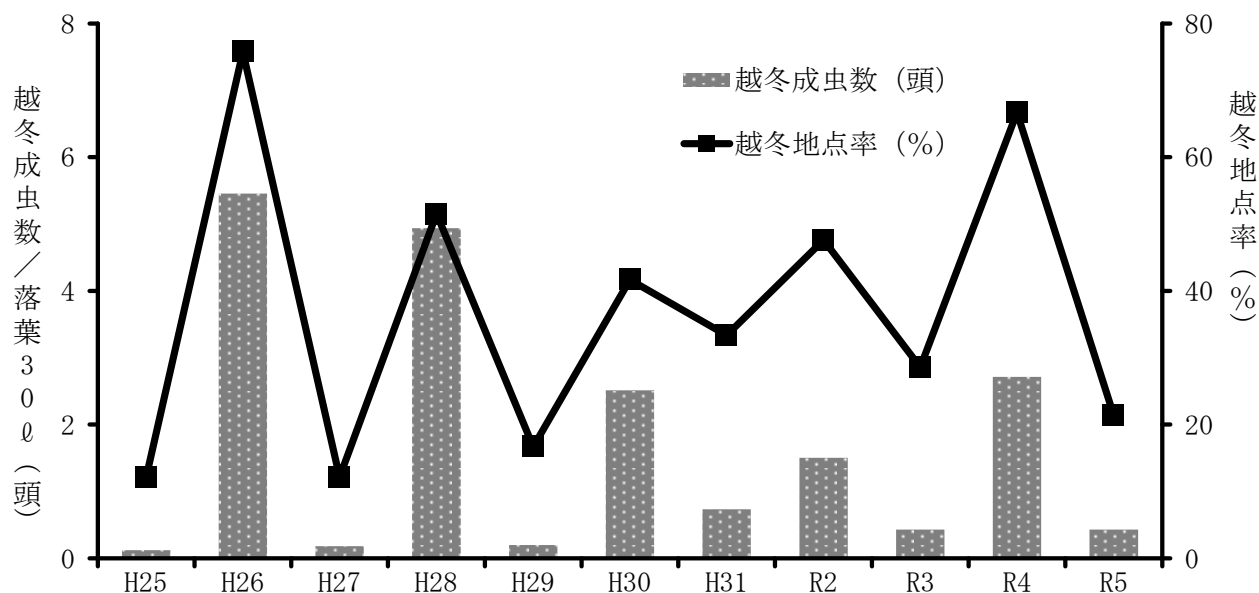


図 チャバネアオカメムシの越冬成虫数及び越冬地点率の年次変動

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 3 月 25 日から 4 月 24 日)

気象庁 (3 月 23 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
	気温	関東甲信全域	10	10	80
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

< 1 週目の予報 > 3 月 25 日 (土曜日) から 3 月 31 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 2 週目の予報 > 4 月 1 日 (土曜日) から 4 月 7 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 4 月 8 日 (土曜日) から 4 月 21 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類※（FRAC コード、IRAC コード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。